

The Origin of «Boy's Love» Novel ?
 —Analysis of Rachilde's *Les Hors nature*

KUMAGAI Kensuke

Keywords: homosexuality, gender, queer, fin du siècle, France, nature, unconscious

Abstract

This paper focuses on the question of representation of male homosexuality in *Les Hors nature* (*Out of Nature*) (1897), a novel written by French “female” Decadent author Rachilde (1860–1953), whose writings provoked scandals at the Fin du siècle with frequent depictions of trans-gendered characters (she practiced herself cross-dressing and cut her hair short) and sexual deviance. The question of male homosexuality is linked to that of misogyny, sexual ambiguity and anti-nature, themes that circulated in contemporary literature (the Symbolist and the Decadent), primarily dominated by male authors.

Though Rachilde's response looks more or less similar to their misogynic mentality because of her will to engage in the society of “belles-lettres”, she tries to divert the meanings of these stereotypes, as she transforms the images of Paul's feminization into those of drag queen (travesty of Byzantine princess) and androgyny (masculinization after feminization). Her choice of featuring gay brothers in *Les Hors nature* can be read as the desire of the authors (and readers) of the Boy's love novel, who are attracted to gay men despite their heterosexual orientation (fag hag). Comparing this French decadent novel with a genre of modern Japanese fictions, this article hopes to show the modernity of Rachilde's novel.

BL 小説の起源？

——ラシルド『自然を外れた者たち』分析

熊谷謙介

呪われた作家、ラシルド？

ラシルド——、この男性名のペンネームを持つフランスの女性作家の作品が論じられることは、依然として少ない。1880年の文壇デビューから93歳で死を迎える1953年まで、彼女は小説を中心に作品を文字通り死ぬまで書き続けたが、例外的な長寿のために存命中から作品が古びてしまったことは確かに否定できない。『19世紀フランス文学事典』の記述によれば、彼女の作品はその時代その時代の文学の発展を表したものであり、自然主義から象徴主義へ、デカダンティズムから1920年代の狂乱の時代のエロティズムへと移行していったが、「生来の作家であるラシルドは、容易に書いてしまうという罫にはまった作家であり、あまりにも速く書き上げてしまった」¹⁾という言葉で結論づけられている。彼女の死後長く、本国フランスにおいても、19世紀末のデカダンス文学の徒花として好事家が注目する以外は、豊饒な作品群に比して、作品の校訂版や作家研究はきわめて少数であった。それは日本においても同様であり、短編を除いた翻訳は現在まで二作品にとどまり、研究も散発

1) 「ラシルド」(クロード・ドフィネ執筆) *Dictionnaire des Littératures de langue française XIX^e siècle*, Encyclopaedia Universalis / Albin Michel, 1998, p. 568. 本稿では、出版地については記述を省略する。

的に見られるのが現状である²⁾。

しかし1990年代から、本国フランスよりむしろ英米圏でラシルドの再評価が始まった。それも文学研究よりむしろジェンダー研究の視点から、ラシルドの作品の革新性が論じられている。その中でも、裁判による発禁処分というスキャンダルによってラシルドが文壇で認められるようになった作品、『ヴィーナス氏』（1884）が注目されている。貴族である「女性」ラウルと花屋で働く「男性」ジャックが、それぞれ「男性」と「女性」として、生物学的性を逆転させて結婚をする。ラウルがジャックを支配的に操り、最後には彼を死に導き、蠟人形に仕立て上げるという物語は、単なるデカダンス文学ではなく、先駆的なトランス・ジェンダーの作品として読み直しが図られた。現在、充実した注解が付いた『ヴィーナス氏』の英訳と、伝記的側面も充実したモノグラフィーの出版によって、ラシルド研究の基盤ができつつあるという状況である³⁾。

本稿は、ラシルドの長編小説で代表作とされる『自然を外れた者たち

2) ラシルドの作品の邦訳は、以下のものが挙げられる。

一『ヴィーナス氏』高橋たか子、鈴木晶訳、人文書院、一九八〇年。

一『超男性ジャリ』宮川明子訳、作品社、一九九五年。

一「アンティノウスの死」「血を吸うもの」志村信英訳『バルジファルの復活祭—世紀末傑作短篇集』所収、曾根元吉他訳、国書刊行会、一九八八年。「アンティノウスの死」はアンソロジー『同性愛』（国書刊行会、一九九九年）に再録されている。

日本において例外的にラシルドの作品を論じたものとしては以下を参照。原田伸子「ラシルド『ヴィーナス氏』にみる両義性の世界とその表現」『京都産業大学論集—外国語と外国文学系列』20号（一九九三年）、一六三—一九三頁；綾部正伯「ラシルド素描—フランス19世紀末デカダンス小説」『東海大学紀要外国語教育センター』21号（二〇〇〇年）、一八三—一九〇頁；中島廣子「フランス世紀末文学にみる普仏戦争のトラウマ—ラシルドの『自然からはずれたものたち』をめぐって」『人文研究（大阪市立大学）』60号（二〇〇九年）、三五一—五三頁。ジェンダー研究からのアプローチとしては次を参照。笠間千浪「ひとつではない男の性／身体—女たちによる〈グロテスク・ボディ〉の実験」『ジェンダー・ポリティクスを読む—表象と実践のあいだ』村井まや子編、お茶の水書房、二〇一〇年、六三—八九頁。

3) *Monsieur Venus: A Materialist Novel*, trad. Liz Constable, Melanie Hawthorne, Madeleine Elise, Reynier Boyd, Modern Language Association of America 2004 ; Melanie C. Hawthorne, *Rachilde and French Women's Authorship : From Decadence to Modernism*, University of Nebraska Press, 2001 ; Regina Bollhalder Mayer, *Eros décadent : sexe et identité chez Rachilde*, Honoré Champion, 2002.

『*Les Hors nature*』(1897)を、とりわけ女性作家が描く男性同性愛という観点、現在で言うBL(Boy's love)の観点から論じようというものである。但し、この小説は決してこうしたテーマにのみ還元されるものではない。男性同性愛のテーマは女性嫌悪やトランス・ジェンダー、近親相姦という問題とも接続するだろう。またここではラシルドの作品、さらには彼女がとった行動や表明した思想の是非を判断するのではなく、同時代の言説(男性作家側の女性嫌悪、ファム・ファタル、男性が支配する文壇、勃興期のフェミニズム運動…)と比較しながら、ラシルドがとった独自の位置を測ってみたい。そして、題名にも表れている「自然／人工」のモチーフは、単なる対立の図式を超え、捻転をほどこされて作品全体を貫くものとなっている。本稿は、筆者自身のラシルド研究の出発点として、できる限り多くの論点を提出し、『自然を外れた者たち』だけではなく彼女の他の作品を読むための導入となればと考えている。BLという視点によって、ラシルドの現代性を明らかにすることが、本研究の最終目標である。

世紀末を生きたラシルド

まず、『自然を外れた者たち』(1897)に至るラシルドの半生を紹介することから始めよう。ラシルド、本名マリー＝マルグリット・エムリーは、1860年にフランス南東部、ペリゴール地方のクロという町で生まれた。父は軍の大尉であり、家族を連れて戦線を移動することも多かった。母は裕福な家の出で、乳母に子育てを任せ、交霊術といった超自然的なものを好む女性であった。「男の子が生まれてくれば良かった」と嘆く父に対して、マルグリットは乗馬や狩猟を覚え、少年のような格好をすることで、両親の関心をひこうとした。後年、「ああ神様、私を

少年に変えてくださいませ！ 少女である限り、両親は私を愛してくれないのだから！」⁴⁾と述懐している。こうした傾向は文学デビュー後の男装や、彼女の作品群に通奏低音として響いているトランス・ジェンダーのテーマに大きな影響を与えることになる。

1870年の普仏戦争において、一家は父の赴任地からクロに引き上げの際にドイツ軍に襲撃される経験をしたが、こうしたトラウマは、『自然を外れた者たち』ではプロシア人の父とフランス人の母に訪れた悲劇に変奏されている。その後、神秘に満ちたペリゴールの自然と動物たちに囲まれて、彼女は土地の不思議な伝承をもとにした物語を書くようになる。正規の学校教育を受けなかった少女は——1870年代は第三共和政による女子公教育の拡充化がまだ行われていない時期である——、祖父の本棚にあるサド侯爵の作品などを読みふけて育った。地方紙にいくつか作品を出した後、1880年、パリの文壇にデビューする。その際に使われたペンネームの「ラシルド」は、1876年、母が行っていた交霊術の儀式の際に、偶然出現したスウェーデンの16世紀の男性貴族の名であった。マルグリット・エムリーはラシルドとなって、いわば文章のうちで別の——男性のあるいは両性具有の？——アイデンティティを生きることを始める⁵⁾。ある意味、彼女の人生は、定められたアイデンティティから脱出し続ける運動であったと言える。

ここで特筆すべきことは、彼女の男装の試みである。先に述べた『ヴィーナス氏』がスキヤンダルを巻き起こす頃から、ラシルドは髪を短く切り、端正な男性の衣装を着て舞踏会に現れた⁶⁾。当時異性装は法律で

4) *Pourquoi je ne suis pas féministe* (『なぜ私はフェミニストではないのか』), Édition de France, 1928, p. 40.

5) Mayer, *op. cit.*, p. 15. ラシルド Rachilde という名は、男性の名を表す一方で、語の最後に e をつけることで女性性を暗示しているとも解釈できる。

6) ラシルドは自身の遍歴について、『死ぬほどに』と題された作品の序文で次のように記している。「彼女は良き教育というものを完全に脱ぎ捨て、支離滅裂な女として振る舞い、伝統

禁じられており、彼女自身が知事に許可を申請して男装していた点も興味深い、実際のラシルドの異性装は長期間貫かれた実践ではなく、ある決まった時期に行われたパフォーマンスであった。また小姓が着るような服装を好んだラシルドは、男性性を強調するというよりは、「女性的な少年」を演じようとしていたと解釈できるだろう⁷⁾。後者のいわば逆向きのトランス・ジェンダーの現象（女性が男性を演じる果てに、むしろ男性が演じる女性に近くなること。あるいは男性が女性を演じる果てに、むしろ女性が演じる男性に近くなること）は、『自然を外れた者たち』でも重要なモチーフとなる。

ラシルドは1889年に編集者アルフレッド・ヴァレットと結婚し、歴史に残る雑誌となる『メルキュール・ド・フランス』の創刊に尽力する。彼女は書評などを通じて若い才能の発掘を進めた。ラシルドは火曜日に主宰したサロンに多くの文学者を集めたが、とりわけアルフレッド・ジャリをいち早く評価し、彼の前衛劇『ユビュ王』を上演するように作品座を説得した（また『自然を外れた者たち』と同年に、ジャリも兄弟の同性愛を描いた『昼と夜と』を発表している）。また男性同性愛者であった作家ジャン・ロランとの交流や、イギリスで有罪判決を受けたオスカー・ワイルドとアルフレッド・ダグラスの同性愛について擁護の筆をとったことでも知られている。またこうした活動の中でも、自らの作品を発表し続けている。『自然を外れた者たち』に関係が深いものとしては、『アドニス夫人 *Madame Adonis*』（1888）が挙げられる。ルイとルイーズの夫妻がマルセル・デザンブルという同じ人間をそれぞれ知らず

的な男性の衣装を身に着け、デカダンの名士たちとともに舞踏会に駆け付けた」Préface d'*À Mort*, repris par *Rachilde-Maurice Barrès : correspondance inédite 1885-1914*, Michael R. Finn (éd.), Centre d'étude des correspondances et journaux intimes des XIX^e et XX^e siècles-CNRS, Faculté des lettres-Brest, 2002, p. 172.

7) Hawthorne, *op. cit.*, p. 101, 111.

に愛人としてしまう（夫にとっては女、妻にとっては男とする）物語であり、『ヴィーナス氏』に続き、セクシュアリティの曖昧さが主題となっている（題名も『ヴィーナス氏 *Monsieur Vénus*』と対となっている）⁸⁾。『自然を外れた者たち』においても、主人公である兄弟の弟ポールが「女性のように」身づくろいをする姿に対して、兄が「こんな風にアドニスするのは馬鹿げているぞ」⁹⁾ という台詞があるが、ラシルドの作品においてアドニスは、その美によって男性／女性の境界を攪乱する存在であると言えよう。

『自然を外れた者たち』はBL小説か？

さて、これから『自然を外れた者たち』を分析する前に、この作品をBL小説の先駆的作品として定義づけることの意義について確認したい。現在の日本において、「BL（少年愛）」あるいは「やおい」と呼ばれるジャンルはその新奇性と流動性のゆえに、定義を与えることが難しい状況にあるが、「①女性によって書かれ、②多くは異性愛の若い女性が窃視的に消費する、③若い男性が登場人物の同性愛的—エロティックな作品」¹⁰⁾ という定義から考えてみよう。

ラシルドの『自然を外れた者たち』をこの定義に当てはめると、③は十分に満たしているが、①については若干の留保をつけて上で満たしている、②については解答不能と言うことができる。①について、ラシルドは「女性」ではあるが、いわば特別枠をあてがわれる「女流作家」と

8) Micheline Besnard-Coursodon, 《*Monsieur Vénus et Madame Adonis : sexe et discours*》, *Littérature*, N° 54, 1984, pp. 121-127.

9) *Les Hors Nature. Mœurs contemporaines*, Mercure de France, 1897, p. 8

10) 「日本映画」(アンドリュウ・グロスマン執筆) *An Encyclopedia of gay, lesbian, bisexual, transgender & queer culture* (オンライン百科事典) より引用。

http://www.glbtc.com/arts/japan_film,2.html (2013年9月18日閲覧)

しては位置づけられていなかったことを指摘したい。マルク・アンジュノの社会学的分析によれば、当時の「婦人作家 *dames-écrivains*」の文学生産量は全体の5%を占めていたが、女性作家が支配的な位置を占めるジャンルは少年・少女文学、青年文学であった。しかしそうした作家に対して、ラシルドは偉大なる例外であり、ラシルドの作品が流通するのは、公認の文学、いわゆる純文学の領域であった¹¹⁾。したがって、現代日本において、BL小説そして「やおい」小説の著者である多くは無名の女性作家と、ラシルドの位置は大きく異なっていると言えよう。また読者層については、同じくアンジュノが指摘するように、姦通文学や放蕩を題材にした作品が、女性を主たる読者層として想定していたことは確かであるが¹²⁾、ラシルドの「純文学」作品が、果たしてそれに該当するかは不明である。『自然を外れた者たち』がまずは文壇誌である『メルキュール・ド・フランス』に連載され、本として出版された後に出た書評がほとんどすべて男性作家によって書かれるのを見ると、少なくともラシルドが女性読者を想定して書いたというのは難しいであろう。彼女が「ラシルド、文人 *homme de lettres*」と、「男 *homme*」を喚起するような言葉で署名していたというエピソードは、トランス・ジェンダー的な意思として解釈されるべきではなく、文壇という純文学の場へ、文字通り自らを「登録する = 記入する *s'inscrire*」振る舞いとして考えられるべきであろう。とはいえ、このような距離を意識しながらも、『自然を外れた者たち』をBL小説の起源の一つとして想定することは、ラシルドの現代性、そしてBL、やおいの歴史性を考えるうえで、大きな意味があるように思われる¹³⁾。

11) Marc Angenot, 《Des Romans pour les femmes : un secteur du discours social en 1889》, *Études littéraires*, vol. 16, n° 3, 1983, p. 321.

12) *Ibid.*, p. 337.

13) BLと異なり、やおいには何らかの原作を加工する二次創作的側面が特徴として挙げられ

『自然を外れた者たち』梗概

これから『自然を外れた者たち』を分析する前に、簡単に登場人物と物語を紹介しておきたい。

ルトレールは三十二歳、ポール＝エリックはもうすぐ十九歳の、年が離れた兄弟である。父はプロシアの男爵家であるフェルゼン家の武官、母は第二帝政下のフランスの宮廷を彩る貴婦人であり、普仏戦争のさなか、父は戦死し、フランスに帰らされた母はポールを産み落とすと同時に亡くなった。「赤子を胸に抱きかかえ」て苦難の時を生きたルトレールは、保護者として弟を育てていく。ポールはルトレールを「父であり、兄であり、親友」、「友人もいないこの汚れた社会の中で唯一愛情を注げるもの」として敬愛していた。一方ルトレールは、周囲がポールと呼ぶ弟を、ただ一人エリックと呼んで、秘かな愛情を抱いていた。二人は一八八九年の万国博覧会を前にした、世紀末の退廃的なパリの中で暮らしている。

ポールは自分よりはるかに年上の愛人であったジュヌヴィエーヴ（クロサック伯爵夫人）に別れを切り出し、新たに恋人としたジャヌ・モンヴェルを、自らの脚本で女優として売り出そうとするが、彼女は舞台上の事故で悲劇的な最期を迎える。カーニヴァルの夜、ポールはオペラ座の仮面舞踏会でビザンツの王女（これは母を知らないポールにとって、母の似姿である）に扮して悪ふざけに興じる。彼が寝入ってしまった枕

るが、その点から見ると、『自然を外れた者たち』に原作の存在が明示されているとは言えない。但し、『ヴィーナス氏』が、男性が思い通りの姿の女性を夢みて、人工物として制作するに至るピグマリオンの神話に対して、両者の性別を転換させた作品として解釈できるように、『自然を外れた者たち』も、「神話の集積物」（ジャン・ド・パラシオ）として、ある種の原テキスト（例えばカインとアベルの物語）を想定することができるかもしれない。Jean de Palacio, préface des *Hors Nature*, Séguier, 《Bibliothèque Décadente》, 1993, p. 11.

もとで、ルトレールは彼を見つめる（第1部）。

二人がパリからロシューズの城に移って一年経った。ポールの少女のようなあどけなさは消え、精悍な姿を見せるようになった。ルトレールの苦悩はもはや後戻りできないところにまで高まっていく。そんな折、領地の教会が放火されるという事件が起こる。ルトレールはついにポールへ告白をし、ポールは衝撃を受ける一方、放火したのはマリーという農民の娘であった。二人は彼女に興味を示し、罪を問わずに城に招き入れる。ポールは彼女に恋愛感情を抱くが、それに嫉妬したルトレールはポールを折檻する。ルトレールはマリーが自分に好意を寄せるのを恐れ、むしろマリーにポールの世話をさせる。二人の愛と嫉妬の関係に翻弄されたマリーは、ついに城館に火を放ち逃亡する。ルトレールはポールを抱きしめながら最期の時を迎える（第2部）、という物語である。

反—自然、あるいは自然の内破

まず題名の *Les Hors nature* から考えてみたい。元となる文章が1896年12月から1897年3月にかけて『メルキュール・ド・フランス』に連載されていたときには、『ダミーたち *Les Factices*』と題されていたことを考慮すると、*hors nature* には「自然から離れた、人工的なもの、虚偽」という意味を読み取ることができるだろう。また副詞句として通常使う *hors nature*（英訳すると *out of nature*）に、冠詞の *les* を付けて名詞句とすることで、雑誌掲載時のタイトルと比べて不均衡感を強めることに成功したように思われる。このような副詞句の作品名への使用は、同時代の作家ユイスマンスが得意としたところであり（例えば『流れのままに *À vau-l'eau*』（1882）、『停泊地にて *En rade*』（1887）、『出発（途上で） *En route*』（1895））、とりわけ『さかしまに *À rebours*』

(1884) は、デカダンの青年を登場させた金字塔的作品であると同時に、反一自然というモチーフを『自然を外れた者たち』と共有する作品である。

またここでいう「自然」は、人工物や都市に対比される、森や田舎といった世界を指すだけでなく、人間の生まれながらの本性も指していることは疑いない。英語で言う「無法者 outlaw」のように、フェルゼン家の兄弟は、道徳——とりわけ異性愛秩序——から逸脱した存在となるのである¹⁴⁾。

しかし、これを単に自然／人工、正常／倒錯の対概念でとらえ、ラシルドの作品を人工天国の瀆神的な称揚に還元することには問題がある。そもそも、世紀末文学の「自然嫌悪」の代表作とされる『さかしまに』も、自然を拒絶するというよりは、自然そのものの中に人工物を見る（例えば月に照らしだされる平野を「澱粉の粉末をまぶされ、白いワールド・クリームを塗りたくられたかのように」¹⁵⁾ 見る）という立場が示されていた。『自然を外れた者たち』の冒頭、弟ポールが求める薔薇色のスズランを、兄ルトレールが科学の力によって作り上げ、弟に手渡すというエピソードは、自然を強制的に変容させる人工的な力だけでなく、自然の内部に潜む変態する力、狂気的なものまで想起させる。また中島廣子が指摘するように、人工物が自然の美を模倣するのではなく、むしろ自然が人工の美を模倣するという考えも、両者の作品に共通するモチーフである¹⁶⁾。後半、ポールが引きこもる温室の「自然」の描写はこれを例示するものであろう。したがって、反一自然というよりはむしろ、

14) 他方、こうした道徳観に対して次のような台詞が吐かれる点も見逃せない。「本能に意固地に抵抗しようとする以上に、自然に反することがあろうか？」*Les Hors Nature* (1897), *op. cit.*, pp. 58-59.

15) ユイスマンス『さかしま』澁澤龍彦訳、河出文庫、二〇〇二年、三九頁。

16) 中島、前掲論文、四三頁。

自然と人工の間の境界が溶解し、自然と呼ばれるものも等しく加工されているという見方が、『自然を外れた者たち』において支配的であると言える。

ルトレールがポールに愛を告げる場面では、いわば彼の信仰告白が長く語られるが、次に引用する部分は作品のタイトルの由来を示すものであり、二人が死を迎えるクライマックスにおいて再び現れるという点で重要な箇所である。

私は自然を自らの意志の舞台装置 décor とした。自然を自らのヴィジョンに応じて変形し、人工物にすることができる神のように、私は自然の外に hors d'elle [nature]、自然の上に超脱したのだ¹⁷⁾。

ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』の思想が色濃く影を落としている箇所¹⁸⁾（「意志」という語はその前から繰り返し語られる¹⁹⁾）、自然は、人間の意志によって形作られた舞台の書き割りのようなものとなる。ジャヌ・モンヴェルの舞台のエピソードに特徴的なように、世界は幻影によって演じられる舞台なのである。そしてこの舞台から降りる、いやむしろ舞台を上から見下ろすことこそ、同性愛と近親相姦のタブーを破り、最後には、愛のためにポールと身を滅ぼそうとするルトレールが至った境地と言えよう。ルトレールがポールに対して、「おまえは本当の「自然を外れた者」ではない……。正直に言おう。私の快楽を言い表す最高の表現というのは、死なのだ。ごく軽い、甘った

17) *Les Hors Nature* (1897), *op. cit.*, p. 228.

18) Guy Ducrey (éd.), *Romans fin-de-siècle : 1890-1900*, Robert Laffont 《Bouquin》, 1999, p. 625.

19) 「われらの意志が同じであれば、われらの意志が本当に生の力となるのなら、われらは再び会えるのだ。さあ行こう、何も難しいことはない」*Les Hors Nature* (1897), *op. cit.*, p. 188 ; 「ひとがなしうるのは、ひとが意志するものである」 p. 228.

るい愛撫の数々に還元されることのない欲望」²⁰⁾と語るように、化粧や装飾によって自然そして男性的ジェンダーを脱しようとするポールだけでなく、表面的には冷静な印象を与えるルトレールもまた、タナトスへと導かれるエロスの衝動に抗しきれなかったという点で、「自然を外れた者」なのである。

最後に、彼らが逃れた「自然」が意味するものとして、女性という存在を指摘したい。19世紀後半のフランスにおいて、女性嫌悪の文脈から女性と自然はしばしば結びつけられてきたが（「女は自然的である。すなわち厭うべきものである」（ボードレール））、『自然を外れた者たち』においてその役があてがわれるのは、マリーという農民の娘である。彼女が登場する場面は、「暗い森の奥からため息がもれた。それはまるで、喪に服していた自然が彼らの冒瀆に抗議して、無言の悲しみの声をあげたかのようであった」²¹⁾と語られる。彼女は教会に放火した、確かに自然の衝動に身を任せたような存在であるが、兄弟の嫉妬に弄ばれた挙句に城館に火を放つことを考えれば、自然を外れた二人に対して、自然から復讐のために送り込まれた野生の女として解釈できる²²⁾。さらに言えば、男性の同性愛秩序を強化するための道具となり、排除されかけた女性の復讐ともみなせるであろう。異性愛秩序の転覆の後に残る女性嫌悪の問題について、次に考えてみたい。

同性愛と女性嫌悪

ラシルドが同性愛を扱ったのは『自然を外れた者たち』だけではない。先にも述べた『アドニス夫人』ではレズビアンのカップルが登場し、男

20) *Les Hors Nature* (1897), *op. cit.*, p. 231-232.

21) *Ibid.*, p. 237.

22) 中島、前掲論文、四五頁。

性同性愛については、二つの短編「ソドムの収穫」(1893)と「アンティノウスの死」(1897)で取り上げられている。二作品において共通するのは、男性同性愛空間からの女性の残酷なまでの排除であり、前者ではソドムに侵入した女性たちは葡萄の搾搾機でつぶされ、後者ではユダヤ女たちが眼をつぶされることになる²³⁾。このような男性たちだけで自足する空間は、『自然を外れた者たち』においても存在し、「わたしたちは二人で世界なのだ²⁴⁾」という台詞によく示されているものである。

また、女性嫌悪の色彩の強い言葉もしばしば見られる。「女性は恋愛に意欲的ではない。彼女たちは、ある力の反映、血の気が失せた反映にすぎないのであり、力を受けるだけでそれを理解しないのだ²⁵⁾」と、ルトレルはマリーを見て考える。ここで「力 puissance」とされているのは先に述べた「意志 volonté」であり、それを有する男性(ポール)は自らの力で再起できるのに対して、女性(マリー)にはそれが不可能であり、「訳も分からず inconsciemment 泥だらけで転げまわる²⁶⁾」だけだとされる。男性と女性を、意志と無意識、能動と受動の対比で分ける図式については、世紀末文学にしばしば見出されるものである。

そして、このような女性嫌悪の言葉を、単に男性登場人物の思想を映し出すものとして、言い換えれば語り手、さらにはラシルドの声とは別のものとして片づけることはできないであろう。オスカー・ワイルドの恋人アルフレッド・ダグラスを支持する「炎上する問題」という文章で、ラシルドは同性愛を普遍的な権利として主張するよりも、精神の貴族だ

23) 後者におけるハドリアヌス帝とアンティノウスの愛の物語については、『自然を外れた者たち』においても、ポールの「ハドリアヌス？」という兄への呼びかけによって想起されている。Les Hors Nature (1897), *op. cit.*, p. 198.

24) *Ibid.*, p. 14. 次も参照。「女がもはや衛生上の問題でしかなくなるような避難場を、英雄的な務めが果たされる場所を一緒に作ろう」p. 25.

25) *Ibid.*, p. 347.

26) *Ibid.*, pp. 347-348. 次も参照。「女性とは、等級の低い意志にすぎない！間違えようもない。私は神で、女は獣だ。しかし、私は孤独だ。ああ、何と孤独なことか！」p. 353.

けがもつことができる個人の自由として擁護している。しかし、その中で女性については、同時代に勃興したフェミニズム運動を揶揄しながら次のように述べられている。「女性を解放する？ いったいどうしてそんなことをする必要があるのでしょゆか。知性を持っている女性、そうでなくても論理立てて思考する力 *puissance* がある女性であれば、望むときに解放されるのであり、問題がないことについては、投票に行く必要はないのです。またその時その時の政府について口出しをする必要もないのです。要求しなくてもちゃんと崩壊するのですから」²⁷⁾。ラシルドはここでも、先述した理性と本能の対概念を前提にして、女性の権利そして同性愛の権利という問題を、能力の問題で覆い隠していると言わざるを得ない。ここにはある種、男性中心的な文壇で例外的に価値を認められた女性もつ、エリート主義が確認できる²⁸⁾。

女性作家による女性嫌悪については、BL 作品を論じる際に成立の一つの要因として論じられることがあるが、ラシルドの場合に特徴的なのは、自らの性に対する生理的嫌悪といったものは、少なくとも『自然を外れた者たち』では表だって現れていないということである。彼女にとって嫌悪すべき女性性というのは、今現在の自分の中ではなく、脱ぎ捨てられた過去の自分、あるいはまだ語るすべを知らない他の女性たちの中にあると考えていたのかもしれない。他方、女性嫌悪と同時に見られるのは、兄弟とマリーの関係の描写に特徴的なように、マッチョ的男性に対する嫌悪である。ルトレールは、ポールが好ましく思っているマリーに対し、彼女が自分のことを好きであることを知りつつも「あなたを

27) Rachilde, 《Questions brûlantes》, *Revue blanche*, septembre 1896, pp. 197-198.

28) 後年、『なぜ私はフェミニストではないのか』において、ラシルドは次のように記している。「女性は男性の劣った兄弟である。というのは単純な理由で、女性たちは身体的な貧困のため、一般的な男性が——最も頭の悪い男性でも——思いつくことができるような思考の筋道から逸れてしまうからである」*Pourquoi je ne suis pas féministe. op. cit.*, p. 14.

弟ポール＝エリックに委ねなければならない。彼の幸福のためでなく、あなたの幸福のためだ…。ぐずぐずしているなら、みんなに体を売ることになるぞ!」²⁹⁾と脅迫している。異性愛であれ同性愛であれ、恋愛における肉体的側面をラシルドは忌避する傾向にあった³⁰⁾。

こうしたことから、女性一般に対する嫌悪と、高圧的で性的な力を誇る男性に対する嫌悪の狭間で、ラシルドは男性同性愛者に好感を持ち、作品に取り上げたのではないかという仮説を立てられるだろう。メラニー・ホーソンが指摘するように、このようなラシルドを現代で言う Fag hag (おこげ)、すなわち異性愛の女性でゲイに魅力を感じるタイプに組み入れられるかもしれない³¹⁾。Fag hag が性的なプレッシャーを感じずに済む安全地帯にあって、男性同性愛者を欲望の対象とするのではなく、彼と同じような存在でありたいと憧れる対象とすることを考えると、確かに男装というパフォーマンスを行い、ジャン・ロランなどのゲイ作家と交流し、世紀末文壇において「文人 homme de lettres」という社会的ステイタスを得たラシルドは、Fag hag の先駆であると言える。

逆向きのトランス・ジェンダー、あるいは両性具有

最後に、『自然を外れた者たち』の白眉とも言うべき、トランス・ジェンダーの表現について見てみよう。化粧室でしなを作るポールを描くことから作品は始まるが³²⁾、物語が進むにつれて、彼の描写に変化が

29) *Les Hors Nature* (1897), *op. cit.*, p. 348.

30) 「ああ、愛人、女性! つまりは私の劣ったもの…。脳内での交感なら二名の参加者には平等が要求されるのに」*Ibid.*, p. 205 (ラシルド強調)。「第一条:愛は、本当の愛とは、知性を持つ人々だけが今なお有する特権である。第二条:すべての肉体的行為は余分である」《*Questions brûlantes*》, *op. cit.*, p. 196.

31) Hawthorne, *op. cit.*, pp. 181-182.

起こることに注目したい。第一章の最後、カーニヴァルの夜の舞踏会におけるビザンツの王女への扮装は、ギー・デュクレーがドラァグ・クイーンになぞらえたほど³²⁾、女性に似せようというよりは、ギリシア十字のついた王冠や式服といった過剰な装飾による、やんごとなきもの、この世ならざるものへの変身と言えるものであった³⁴⁾。他方、第二部に入り、このようなパリでの狂乱の季節からしばらく経った後のポールの様子は、次のように描かれている。

フェルゼン家の次男の様子はすっかり変わった。一年前、つまり兄弟がパリを離れてからである。体つきとしては、えくぼのある、ビザンツの王女よろしく優美に満ちた若者らしさは徐々に消え、独特な、理想の存在へと成長していった。痩せた姿からは、肖像画がモデルにとってかわるように、男の要素も隠れていった。体はさらに引き締まり、肌もいっそう白くなった。ぼんやり無感覚な様子とはうらはらに、きらきらと輝く目は頭が疲れを知らずに活動していることを物語っていた。[……] 彼はもう女装していなかった。イギリスの流行を誇張して、後ろ髪を短く剃り、特になじを露わにした。そしてブロンドの前髪はスクエアト式に二つに自然に波打たせつつ、自然の物とは思われない王冠風の髪結をしていた。そこには悪魔の頭のような隆起が二つ出ているように見えたが、いわ

32) 「痩身に嫵やかな姿を見せるこの若い男は、鏡に映しだした全身を眺めている。猫のように上半身を屈曲させ腰を突き出し、ゆっくりとした動きで、腕を意識的に伸ばして、自分の分身と対面するのであった。頭を反らせ、快楽に打ち震えるかのようにパチパチとまばたきをしては、目を半ば閉じる。自分という酒に酔いながら、ポールは誇らしく蒼白の顔を昂然と上げ、さらにのけぞった。」 *Les Hors Nature* (1897), *op. cit.*, p. 3.

33) Guy Ducrey (éd.), *Romans fin-de-siècle, op. cit.*, p. 627.

34) 「王のアイコンであると同時に神のアイコンであり、俗と聖の二つの世界のアイコンとして、この女性の全身は黄金と宝石によって固められているかのように見えた。それはまるで、身を屈することを知らず、謁見者たちの跪拜に対して身をかがめて応じることなどしないという慣例を持っている女性たちのようであった。」 *Les Hors Nature* (1897), *op. cit.*, p. 130.

ば女性に十分になった挙句に、今度は男性へと変身したようであった。そしてこの二つの魅力的な存在は、だんだんと解きほぐせないほどに混じり合って、両性具有という恐ろしい現象に溶けていった³⁵⁾。

女装をやめたポールは男性に戻ったのではなく、いわば女性が男装したような姿を現しているのであり、そこには先に述べた、ラシルド自身の男装の経験に通じるものがある。すなわち、異性の姿を「まねる」という異性装ではなく、異性となった後で元来の性を「装い」、両性具有的側面を強調するという試みである。実際のモデル（男性）をなぞって肖像画ができるのではなく、肖像画（女性）が先に存在しているのだ（同時代にワイルドが『ドリアン・グレイの肖像』を書いていることにも注意したい）。そして、両性具有を象徴するのが、中世後期のステュアート朝の王女がしていたような頭にこぶがあるような髪型であり、男性でも女性でもない、悪魔的な存在を想起させるものである。

クライマックスにおいて、城館が炎に包まれる中、ルトルールがポールのいる部屋に駆け上がると、ポールは眠った姿を見せているが、彼は「半裸のまま、キメラが散りばめられている柄の日本の絹布にくるまれていた。彼は男性的な仮面をすべて脱ぎ捨てて、眠っている。頬は左腕の黄金のブレスレットの上に置かれていたが、きれいな女性の頬のようであった」³⁶⁾。男性性はポールの核として存在するのではなく、むしろ脱ぎ捨てられる仮面となり、露わとなる素顔は逆に女性性を帯びたものとなる。ここにおいて、逆向きのトランス・ジェンダーは完成に至ったと言えよう。

35) *Ibid.*, p. 194 (ラシルド強調)。

36) *Ibid.*, p. 377.

結論に代えて

以上、ラシルドの『自然を外れた者たち』を、男性同性愛とそれに付随する女性嫌悪やトランス・ジェンダーという問題から考察してきた。この作品をBL小説の先駆とするには、19世紀末のフランスと21世紀初頭の日本の文学場の違いを十分に考慮しなければいけないことは事実であるが、それでもBL作家の女性嫌悪という問題や、fag hagという女性像、そしてドラッグ・クイーンをはじめとするトランス・ジェンダー表象によって、両者に通底する部分が示されたように思う。また反—自然の問題については、これまでデカダンスの美学から盛んに論じられ、女性表象との関連からも言及されてきたが、題名から見ても重要である『自然を外れた者たち』を起点として論じられることは少なかった。今回はセクシュアリティの問題に関連する部分しか論じられなかったが、今後、ペリゴールの繁茂する自然の表象が見られるラシルドの他の作品や、他の作家の自然論と重ねあわせて論じることを課題としたい。これはまた、ラシルドが作品に頻繁に登場させる動物の問題や、性倒錯を含む人間の本能の問題とつながることとなるだろう。

反省点としては、物語の内容面に分析を集中したため、ラシルド特有の文体や話法についての考察にまで至らなかったことである。イタリックの使用や名詞・形容詞の性の大胆な転換を中心にして、他の作品とも関連付けながら考察していきたい。また、『自然を外れた者たち』(1897)に色濃く現れている政治的問題(独仏関係、敗戦国フランスの頹廢、第一部、第二部の副題に見られる「夢」と「行動」の関係など)については、ほとんど論じることができなかった。他の作品や、ドレフュス事件をはじめとする同時代の政治的言説を参照しながら、ラシルド

をはじめとする、世紀末文学において未だ明るみになっていないものについて読解を進めることを課題として、ひとまず論を閉じたい³⁷⁾。

37) 本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）「マラルメと象徴主義を中心とする無意識の詩学の生成とその展開」による研究成果の一部である。